

寄稿

1 ビバ シネマ 映画三昧



フリーアナウンサー

小林 睦郎

昭和 30 年代は日本映画の黄金期だった。私はその頃小学生で西播州 (兵庫県の西の端) の人口 3 万人ほどの龍野という町に住んでいた。市内には当時映画館が 3 館あり、一番老舗の龍野劇場へは家から近いこともありよく通った。とはいえ 10 歳代の少年が一人では映画館には入れず親兄弟なんかに連れていってもらっていた。

龍野劇場は時代劇の 3 本立の上映が多かった。当時大活躍の時代劇のスターは、片岡千恵蔵、坂東妻三郎、大河内傳次郎、嵐寛寿郎、市川右太衛門、長谷川一夫。この 6 人が「時代劇六大スター」と言われていた。この 6 人に月形龍之介を加えて「七剣聖」とも言われた。

「いれずみ判官」の遠山金四郎役の片岡千恵蔵。金さんのお裁きのシーンは今でもはっきりと覚えている。また「七つの顔を持つ男」では、多羅尾伴内の台詞で「あるときは片目の運転手、またあるときは〇〇、しこうしてその実体は…」ここで名乗りをあげるのだが、この台詞を子供ながら真似をしたものだ。

「丹下左膳」の大河内傳次郎。大河内の訛りのある台詞回し「姓は丹下、名は左膳 (シェーワ タンゲ ナワ シャジェン)」は今でも忘れられない。「旗本退屈男」の早乙女主水之介役の市川右太衛門。右太衛門の台詞の合間に入る「パッ」という破裂音も耳に残っている。

「鞍馬天狗」の嵐寛寿郎。アラカンの愛称で呼ばれた。戦前から戦後にかけて「鞍馬天狗」に 46 本出演した。宗十郎頭巾に紋付姿はアラカンの創作だった。あわやという場面で鞍馬天狗が白馬で駆けつける。そのシーンでは観客は大きな拍手を送った。当時は映画にも関わらず観客は拍手をしたのだ。私も拍手をした記憶がある。「忠臣蔵」の大石内蔵助の長谷川一夫。長谷川の台詞で「各各方、討ち入りでござる (オノオノガタ ウチヒリデ ゴザル)」というなんとも言えない台詞が心地よかった。

学校での話題も映画の話が多かった。「今年の忠臣蔵は内蔵助誰がするんやろなあ」とか。

これらの時代劇は少年だった私に映画の面白さ楽しさを植えつけ、映画というメディアと一生付き合っていくきっかけを与えてくれたように思う。

かつて姉に「この子チャンバラの場面が来ると座り直して見るんやで」とよく揶揄された。まだテレビが家庭にない時代、映画は子供たちにとっても偉大なエンターテインメントであり、アミューズメントであった。

先頃亡くなったジャニー喜多川さんはエンターテインメントの世界に入ろうと思ったきっかけは1本の映画だったという。その映画は「ウエストサイド物語」。ダンスと音楽と芝居が融合したミュージカルが彼の心を虜にした。ジャニーさんがこの映画に出会わなかったら今の「ジャニーズ」はなかったかも知れない。

ジャニーさんがこの映画を観た1961年、私は兵庫県立龍野高校1年の16歳だった。この映画の評判を聞き龍野から姫路まで観に行った。ジャニーさんが衝撃を受けたように私も強烈なインパクトを受けた。ある種のカルチャーショックとでもいうようなものだった。チャンバラ映画しか観ていなかった田舎の少年が経験をしたこともない世界を見たのである。小林少年は多少アメリカかぶれをしていた。この映画で完全にノックアウトされた。サウンドトラックのLP盤まで買って聴いた。確かジャケットのデザインがジョージ・チャキリスがセンターで踊っていた。左足を高くあげ両手を横に広げ、Y字バランスのようだった。何回も聴いた。

「ウエストサイド物語」がジャニーさんの心を決めたように、映画は人の人生に深くコミットする。極言すれば映画は人を善きにも悪きにも導く。怖いメディアとも言える。映画は戦争になるとプロパガンダとして使われる。自国の都合の良ように「正義の戦いである」と言われながら国民は洗脳されていくのである。オブラートに包みながら愛国心をあおったりもする。

私は映画が好きだと言うと、好きな作品を挙げて下さいと言われる。敢えて挙げるならば洋画では「ひまわり」、邦画では「砂の器」だ。

「ひまわり」は1970年に公開された作品で、イタリアの名優マルチェロ・マストロヤンニとソフィア・ローレンが主演だった。二次大戦末期のイタリア、二人は愛し合い結婚する。兵役逃れをした罪で彼はソ連戦線に送られる。戦争が終わっても彼は帰ってこない。彼女は彼を何日も待つが帰還しない。彼女は意を決して自ら彼を捜しに行く。捜し回ってついに彼を見つける。そこで彼女が見たものは。若いロシア人女性と幼い子供と幸せそうに暮らしている彼の姿だった。それにはそうせざるをえなかった事情があったのだが。

私がこの映画から教えられたことは、1つは戦争は善良な市民を悲しみのどん底に突き落とすこと。男も女も何ら悪意がないのに悲惨な結果になることがある。優しさのあまりお互いが傷つき合うという不条理。たまらないやるせなさが見終わったあと私の心をおおった。心に紙ヤスリをかけられたように。

「砂の器」は松本清張原作で1974年に公開された。今では高名な作曲家である和賀英良(加藤剛)が殺人を犯す。その理由が自分の父親の秘密を知っていたから。この小説の時代背景は古く、不治の病とされたハンセン病が大きなテーマとなっている。今では治るし感染力も弱いと分かっているが当時は恐れられた。差別する側もされる側も悲しい。殺人を正当化するつもりはないが、彼の心はそうせざるをえなかったのかもしれないと思わされる犯罪だった。清張の作品には過ちを犯した者への優しい眼差しが感じられる。

ここから学んだことは、いかに凶悪に思われる犯罪であっても必ずそのうらには何かが隠されている。早計に犯罪者を断罪することはしてはいけないと思えるようになった。いつでも自分もその犯罪者側に立つかも知れないからだ。

「ひまわり」と「砂の器」から教えられたことは私の思考の一角を成している。

映画は地方再生の切り札となっている感がある。かつては「韓流映画」が日本中を席卷しおばさまがたをはじめとして女性ファンの熱狂ぶりは凄まじかった。聖地巡礼とかいって、韓国の映画のロケ地に旅行した。当然経済波及効果はあった。

ずいぶん前になるが、「小林睦郎と行くヨーロッパ 映画の旅」という企画があった。その時は「第三の男」の舞台であるオーストリアのウィーンのプラター公園の大観覧車を見た。「サウンドオブミュージック」のトラップ一家が亡命する途中のスイスのロケ地に行ったりして私も大いに満足した。和歌山でも多くの映画が撮影された。すべてではないが、年代順に紹介しておこう。多少私の感想も入れながら。

1966 年 「紀ノ川」 1967 年 「華岡青洲の妻」

この二本は有吉佐和子の原作で当然ロケ地は和歌山だった。特に「紀ノ川」は紀北筋で大がかりなロケが行われた。この作品は「築映」の協力が大きかった。和歌山市築地にあった松竹系の映画館だった。のちのち和歌山で撮られる映画には、ロケハンから始まる一連の映画制作の協力を築映はした。今ではこの役目をフィルムコミッションなどが担うことになる。

1978 年 「オレンジロード急行」
大森一樹監督の商業映画第一号の作品で、アラカンこと嵐寛寿郎と岡田嘉子といった往年の名俳優が出演した。今でも覚えているのは、今はないが西汀丁にあった三井アーバンホテルでアラカンと岡田にインタビューしたこと。大森監督が自分の映画にはこの二人に絶対出てほしいと言ったのが印象的だった。

1979 年 「寅さん第 24 作」 1987 年
「同 39 作」

1991 年 「大誘拐 RAINBOW KIDS」
岡本喜八監督の痛快サスペンスだった。原作は天藤真。82 歳のお婆ちゃん（北林谷栄）が国家権力とマスコミを手玉にとり 100 億円を略取するという物語。龍神村やテレビ和歌山が舞台になっていて、知り合いがエキストラで出ていた。

1991 年 「釣りバカ日誌」
ロケ地が由良町だった。

2006 年 「ストロベリーフィールド 海と夕陽と彼女の涙」
田辺出身の太田隆文監督の作品でロケ地は田辺だった。このとき出ていた何人かの新人女優さんは今ではバリバリ活躍している。

2006 年 「幸せのスイッチ」
田辺で撮られた。安田真奈監督の作品で、沢田研二、上野樹里主演の心あたたまる映画だった。町の電器店が舞台だった。

2011 年 「軽蔑」
新宮出身の中上健次原作でロケ地は新宮だった。高良健吾と鈴木杏が好演していた。

2014 年 「ねこにみかん」
有田川町で撮影され、地元のボランティアの方々の協力や資金調達までしたという。

2015 年 「海難 1890」
トルコの軍艦エルトゥールル号の海難事故を画いたものだが串本で大規模なロケが行われた。

2016 年 「溺れるナイフ」
今をときめく菅田将暉主演で新宮を始めオール和歌山ロケだった。

2016年 「ちょき」

これもオール和歌山ロケだった。ハートウォーミングな作品で和歌山市内の見慣れた風景がうまく切り取られていて嬉しかった。

2017年 「鋼の錬金術師」

和歌山マリーナシティのポルトヨーロッパで撮影された。ポルトヨーロッパは頻繁にロケ地に使われる。

2018年 「ボクはボク、クジラはクジラで、泳いでいる」

勿論太地町の「くじらの博物館」が舞台になった。オール和歌山ロケの作品だった。

2018年 「見栄を張る」

海南、紀美野町、有田市、有田川町で撮影され、今も日本を始め世界各地で上映が続いている。

以上、和歌山でロケをした作品を紹介したが、これがすべてではない。和歌山を広くアピールするメディアとして映画は有力な方法である。経済波及効果も見込まれる。田辺市で新人監督の登竜門として広く知られるようになった「弁慶映画祭」がこれからもますます栄えんことを期待して大きな拍手を送りたい。

最後にもう一度言うが、映画は人の心を、人生をも変えてしまうメディアであることを制作に携わる人たちには肝に命じて欲しい。どんなに時代が変わろうとも足を運んで映画館で観る映画は不滅であると信じている。少年時代のような純粋な心は失ってしまったが、今でも映画は私の心にじわじわと感動を与え続けてくれる。